"初心"が失なわれたデモ選への警鐘

志賀 仁郎

日本の基礎スキーにとって、いや、一般大衆スキーヤーにとっても大いなる関心が持たれているのがデモンストレーター選考会（デモ選）だ。こんにち程注目されはじめたのは、いまから五年ばかり前からだが、いわばこの時からデモ選が"変質"しはじめたという。デモ選の本来のあり方から逸脱した、というその逸脱の仕方はどのようなものか、スキーの将来の正しい発展を願って打つ警鐘の響きは八方の空にこだまするか——。

ズバリ！"競技会"の雰囲気

春三番は冷たい雨を伴って八方尾根に吹き荒れていた。黒菱の東側の斜面にセットされた44双旗の旗は、寒さにふるえているように見えた。第九回全日本デモンストレーター選考会(デモ選)の最終種目は、かなり苛酷な条件での試合となった。冷たい雨に体をぬらして緩斜面パラレル、急斜面ウェーデルン、ブレ・ジャンプ、悪雪滑降と四つの種目の演技を終わった60人の若者たちが、冷え切った脚を、このスラロームビステに運んだ。午後になって気温が下がり、雨はみぞれまじりに肌につきささる。出場者の冷え切った脚をメーカーのサービスマンが懸命にさすってスタートを待つ。悲壮感といった感情がスタート地点にあった。全日本のナショナルチームのコーチであるO君がAスキーをはく選手に「前半はやや慎重に、リズムに乗ったら思い切って行け」とアドバイスを与えている。

こういったムードは、全日本選手権、あるいはインカレといったレースでのそれだ。

塩で固められたコースは、急斜面ウェーデルン、悪雪滑降と、ザクザクのくされ雪になれた足、そして冷えて堅くなった筋肉には負担になったのだろうか、誰のスキーもあまり鮮烈な印象はない。一本目がそろそろ終わりに近づいた頃、Bスキーの C君が、イキなスニード・ハットのつばから雨のしずくをたらしながら、何か心配そうな表情で旗門のわきを登って来た。彼は、今シーズンずっとF君と一緒に各地のスキー場を滑り回って来た。このデモ選へも、彼はF君をサポートするトレーナーといった立場で八方に来ていたはずである。

彼は筆者に「4秒差は何点ぐらいになりますかね」と、声をひそめて聞いた。

F君は一本目でS君に4秒の大差をつけられているというのだ。第一日目の得点差わずか3点で1位2位を争っているF君とS君との二人。この4秒によって、逆転されるかもしれない、といった不安を彼は感じていたようだ。

風が北へ回り、気温はさらに下がり、おまけに濃いガスが斜面をおりて、ビステをかくしはじめた。この苛酷なレースの場は凄惨とも呼べるムードになった。

深く浸透する商業主義

二本目を終えた選手たちは、後から滑る仲間を待たずに兎平の斜面を降り、八方山荘裏にならんだ四つのテントに向かう。

「ヤー、ごくろうさんでした。まあ、一杯お茶を飲んで行ってください」Cスキーの社長が声をかける。テントの中には、石油カンを改造した急造コンロに炭火が燃えて、大きなヤカンにお湯がにえ立っていた。

二日間のきびしい競技は、胸をしめつけられる凄惨なスラロームによってすべての種目を終了した。

その夜、緊張から解き放たれた若者の姿があっちのホテル、こっちのバーに溢れた。デモ選に青春のすべてを賭けて来た若者たちのシーズンは終わったのだ。

この夜を含め、私は数多くのデモ選に関わり合いを持ち、あるいは持って来た人達と話し合った。そして多くの語らいの中から、誰の胸にも今回のデモ選のムードには、従来のものにはなかった何かがある、と感じ、そしてこのままでは、このイベントが、とんでもない方向に行ってしまうのではないか、といった危機感のようなものが生まれていることを知った。

私の耳にした意見は、そのどれもが否定的な意見であったように思える。それ

Zin shiga

くそして静かに浸透しているようである。

賑やかなテント村風景

デモ選のはじまる二、三日前から、兎平の八方山荘の裏に、Cスキーが恒例のテントを出した。つづいて、D、B、A、Eスキーとその数は今年は五つ。にぎやかなテント村風景といえるのだが、この兎平の斜面を正面に見すえるテント村が、商業主義の主戦場になった。さすがに長い間このイベントに深いつながりを持って来たC社のテントは際立ってにぎやかに見える。今回の出場選手の75名にも及ぶ圧倒的な使用率からいって当然ともいえるのだが……。C社社長の陣頭指揮によるサービスも、また、いたれりつくせりで、滑走面の手入れからワックス塗りまで、そしてそのメカニックサービスの脇ではお茶の接待と、かなり、はなやかなものである。

このデモ選にかなり遅れをとって来た国産各メーカーも、昨年あたりから、C社追い落としの秘策をねって来たのであった。それが一挙にC社一社のテントから、五つのメーカーの競い合うテント村の出現となり、雪の上のサービス合戦となったものといっていい。

こうしたムードを見て、何人かのスキー関係者はマユをひそめる。

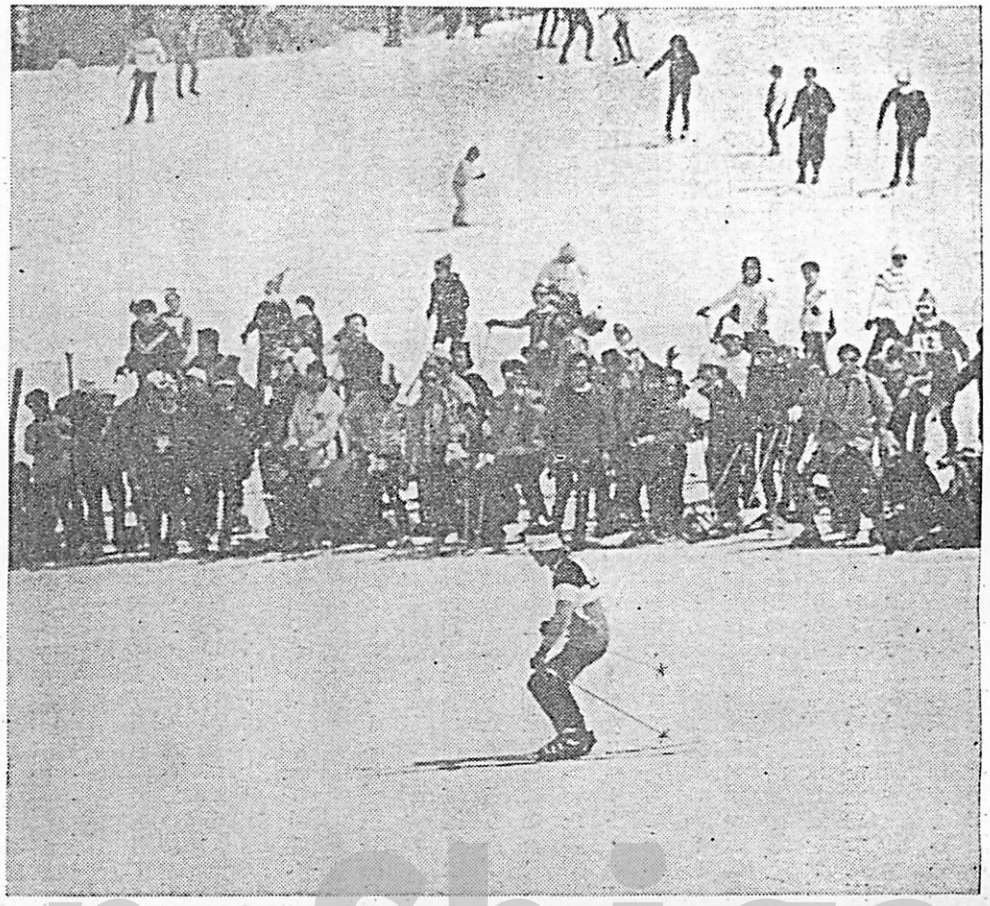
かつて全日本のトップランクのレーサーであり、長い間、この八方スキー場でパトロールの隊長をつとめて来た笹川正通君は、きびしい口調でいう。

「自分のスキーの手入れも、ましてワックスまで他人に塗らせるとはとんでもない。スキーはスキーヤーにとって武士の刀のようなものではないか」と。

初心者にスキーを教える立場にあるものが、自分のスキーも他人まかせというのはゆるせない。彼らはワックスの塗り方、選び方を教える場合もあるはず。それがスキー教師として当然なのに、ましてデモンストレーターには一般に全日本のよりすぐりのスキー教師というイメージすらあるのに、あの姿勢は許し難い、というわけだ。

こうした批判は、この正通君に限らず、私が話を聞いたほとんどの人達が口にした言葉である。

長野県チームをひきいる白馬山麓スキー学校の丸山芳光君は、こうした現象をあげて、「競争の選手が、ある面でこうしたメーカーサービスを受け入れる必然性はあると思う。レーサーはいわば競走馬のようなもの。メーカーの万全のサービスを得て、ただ一途にタイムを追う。そこに片端な人間が出来ても仕方がない。しかしスキー教師は、他人にものを教えるのである。それがスキーの手入れを他人にまかせるといった態度、そして中には、スキーも脱がずに、ヒョイとスキーのテールを肩に『オーイ！ ワックス塗ってくれ！』というデモンストレーターがいるのには腹が立つ」という。



一般スキーヤーの関心と注目を集めはじめた近代のデモ選では，各種目共たくさん観衆が集まる

は、「このイベントを頂点に見すえた若きスキーヤーたちの研さんの行為が、日本の基礎スキー界の技術的なレベルを高め、自らのスキーの限界に挑むスキーが、新しい技法の発想を生み、それが新たな指導理論への道を開く、といった実りを日本のスキー界にもたらした」という、ゆるぎない評価を十分に認めた上にもそれらの否定的な意見は重くのしかかってくる。

すでに9回、このはなやかなイベントは自らの歴史と呼べるものを持つ基礎スキー界の最大の行事に成長した今、ようやく大きなターニングポイントにさしかかっている。

オリンピックの開幕すらも危ぶませた、カール・シュランツ問題に見るアマチュアリズムと商業主義といったシビアな問題も、このデモンストレーター選考会をとりまくムードの中には、すでに深

Zin Shiga

問われるデモの役務

毎回、開会式の時に語られ、またSAJの公式プログラムの中に記される教育部長のあいさつの中で、必ず入っている一節がある。それは、

「デモは単に技術のうまいデモ屋であってはならない。デモはすぐれたスキー教師の中から選ばれるのだ」といった意味の言葉なのだが。

「今日、デモの諸君が一般スキーヤーに与える影響は実に大きく、それだけに、ただ技術がうまいだけではデモとしては不合格なのであります。デモとは技術に人間性が加味されてはじめて、SAJ（全日本スキー連盟）のデモとしての資格が与えられるものである」（6回デモ選）

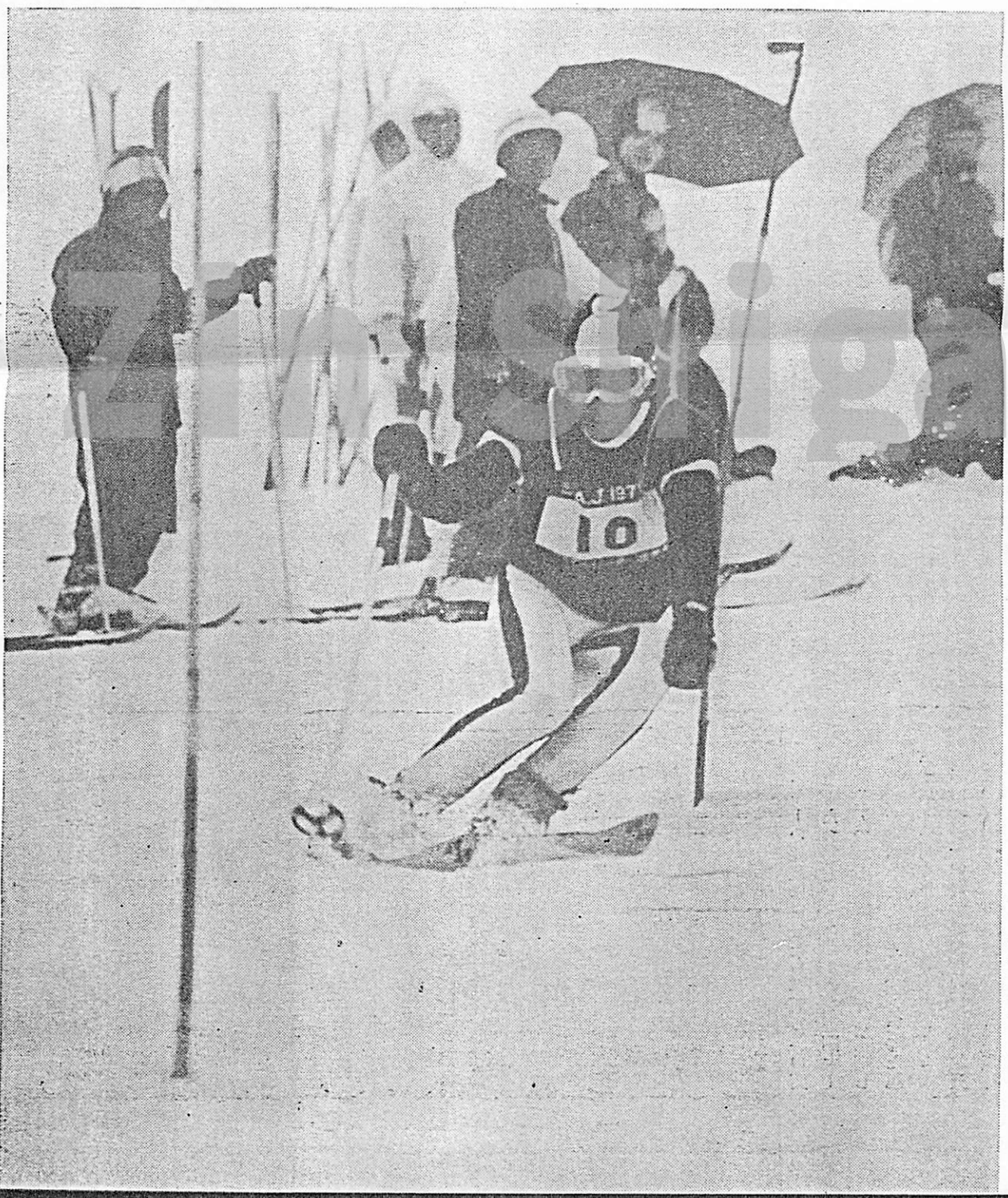
「これからは国際人としてのデモンストレーターを育てあげ、国際スキー社会の中に大きく入って行かなければなりません。そのためには、まず日本の数多いスキーヤー達に尊敬されるデモンストレーターでなければいけません」（8回デモ選）

この言葉の中に、デモンストレーターに対するSAJの期待の一端が読みとれるだろう。

メーカーの手に自分のスキーの手入れを何のためらいもなくゆだねるデモに、反発を感ずる人があっても当然といえるだろう。

このようなメーカーのサービスの状態は、次第にエスカレートする宿命を持っている。特にこのイベントにおいて、C社一社の独走をゆるして来た各スキーメーカーが、この行事に関心を寄せ、積極的にこの場を商業戦の戦場とすることによって、ますます加熱することは明らかである。来シーズンになれば、D社は、ことしのC社を上回る人員とスキー

雨が降る中で行なわれた回転競技。観戦する者もカサをさしての熱心さ。滑り手も見る方も全日本選手権クラス



修理台などの設備を増強して挑戦するであろうことは想像にかたくない。

丸山芳光君は、あるメーカーの現地責任者に「あんたら、もうこれ以上毒をまかんでくれ。人間は弱いものだ。あんたらが毒をまいて若いスキー教師をおかしくするのは簡単だ。しかし二、三年たって、彼らがデモをやめて、地元のスキー学校の教師として帰った時、彼らをもう一度たたき直さなければならないのは俺たちなんだ。あんたらとの交際はデモとして通用する二、三年だろうがわれわれ地元の人間は、それからも一生つきあわなければならないんだぜ」と。

丸山芳光君の言葉には少なくとも日本最大のそしてすぐれたスキー学校のリーダーとしての重みが感じられた。

今回のデモ選の期間中に次のような噂を耳にした。「あるスキーメーカーからうちのスキーをはけば、スキーばかりでなくバインディングもストックも、靴、手袋、セーター、スキーズボンなど、すべてを無料で提供するとさそわれてスキーをはき変えたデモがいる」というのだが、そうした話が何の抵抗もなく受けとられる、といったあたりにこのデモ選をとりまく商業主義の浸透の実態があるといえるのではないか。

躍進の年に開かれた第一回

デモ選を商業主義の戦場に変えた歴史的な経過をふり返ってみよう。

デモ選の企画がとり上げられたのは一九六三年の春。その前のシーズンにイタリアのモンテ・ボンドーネで行なわれた第六回インタースキーに、日本スキー界からはじめて公的な代表として参加した大熊勝朗氏らの提唱によって、第七回のインタースキーへ日本もデモンストレーターを派遣しようといった発想からであった。

一九六三年のシーズンは、オーストリアからクルッケンハウザー教授らの一行を迎え、日本各地でオーストリアスキーの講習会を開いた年であった。

この一九六三年は、日本の基礎スキー界においてもっとも大きな収穫の年であったといえる。この講習会にアシスタントとして参加した各地方の若い技倆抜群のスキー教師らによって、日本の基礎スキー界の躍進の基礎が作られたと見てもよいであろう。

オーストリアから派遣されて来たフランツ・フルトナーをリーダーとした三人のデモンストレーターの示した美しく正確な、そして力強いスキーは、日本の若いスキー教師たちを奮起させる起爆剤になったのであろう。

特に、アシスタントとしてほとんどその一シーズンをこの名手達と共に過ごした幸運な若者たちの技術は、著しい進歩を見せた。現在日本基礎スキー界の担い手として名を知られるスキーヤーの何人かが、この中にいたのである。

この日本のスキー界の飛躍の年に第一回のデモンストレーター選考会が開かれたのである。クルッケンハウザー教授一行のアシスタントとして活躍した岸英三、平沢文雄、北沢宏明ら20名の名手がその候補に選ばれ、次の年の一九六四年三月、第一回のデモ選が八方で開かれた。

この第一回のデモ選は、候補の指導員たちと採点に当たるSAJの役員が、共に細野の八平荘に合宿し、技術をきそい、スキーについての夢を熱っぽく語り合った。彼らに共通する思いは、オーストリアのスキーによって目をさまされ、日本のスキーの将来に自分たちが何らかの実りをもたらしたい、スキーの先進国オーストリアのスキー教師に負けない素晴しい技術の持ち主になりたい、といった思いであったろう。

平川啓紀、平沢文雄、宮沢英雄、北沢宏明、丸山庄司、斉藤城樹とならび高村雄治、黒岩達介らの名が上位にランクされた。参加者は18名であった。

暖かい陽射しを受けて閉会式。報われた者、報われなかった者、等しく来年をめざしてまた、ひた走る

Zin Shiga

あるスキーメーカーとデモ選

翌年第七回のバドガスタインのインタースキーへ日本は、はじめて5人のデモを送り、その流麗、正確なスキーで世界のスキー指導者の賞讃を浴びたのである。

出場者のスキーを一応はチェック。いたずらに混乱を招かないためにも、この辺で有効な手を考えるべきか

この時、はじめてデモンストレーターなる人達をヨーロッパに送り出すに当たって、SAJは国産各メーカーに対し、各社二台ずつのスキーの提供と協賛金の呼びかけを行なったのである。ほとんどのメーカーは、この呼びかけにはあまり積極的な姿勢を見せなかったようだった。それは、このデモというものに対する理解やインタースキーという会議への関心もほとんどなかった頃の話であるから当然といえるであろう。

こうして集められたスキーの中から自分の好みに合ったものをそれぞれ5人のデモに選ばせたといわれる。ところが偶然にもCスキーに人気が集まり、スキー販売のシーズンも終わりに近い頃に、急に5人のスキーをひとつのメーカーでといった情勢になったといわれる。

第七回インタースキーに参加するデモによってCスキーの評価が生まれ、この時以来デモ選とこのメーカーとの深い関わり合いが生まれたといえるだろう。

当時のデモンストレーターたちは、無償で供与されたスキーに大きな愛着を感じたという。当時、よほど有名な競技スキー選手でもスキーをタダでメーカーからもらうということには若干の抵抗があった時代だった。ましてやスキー教師にとって、こうした好意が、どんなものとして受け止められたであろうか。こんにちまでそのわずか10年足らずの間に、デモ選に出場するスキーヤー60人のスキー板の中に、自らのサイフをはたいたスキーが見当たらないまでになってしまったのである。

さて、第二回のデモ選はバドガスタインのデモを加えて、志賀高原で開かれた。その上位に入賞した10名によって、スキー教程のための写真が撮影された。第七回インタースキーへの派遣について一般のデモンストレーターへの関心が高まった。

こうして、デモが使用する白いスキーとしてCスキーの評価がかなり高まったのは事実であろう。当時、スキー界そのものがオーストリアへの傾斜を強め、欧米礼讃のムードの中で、スキーの板も舶来物への人気が高まりつつあった。こうしたムードに国産各メーカーが頭をかかえていた頃、C社のスキーは大きくその販路を拡げる土台を作り上げたともいえるだろう。

過熱する一方の商戦

デモ選は、第三回（一九六六年）ころからようやくその形体を現在のようなものに定め、SAJの主要な行事のひとつに加えられるようになった。そして第四回・第八回のインタースキーへの派遣デモを選考するデモ選ではじめて、多くの報道関係者、観衆が八方の斜面を埋めた。

この時のデモ選に参加したスキーヤーは一〇一名、そして使用されたスキーの中でCスキーは何と67台を占め、入賞者30名中26台という驚異的な数字を残した。このシェアは異常であり、C社がとったデモ選参加のスキーヤーへのアプローチの的確さを物語って余すところがない。同時にこのイベントへの他のメーカーの出遅れを考えずにはいられまい。

Cスキーはその後、五回、六回、七回とデモ選においては圧倒的なシェアを占めて独走を続け、このイベントでの評価を有利に商戦へ結びつけた。

しかし、この異常ともいえるシェアに何かデモとメーカーとの関係に不自然な

ものを感じた人達があったのも、その占有率の異常さゆえに当然といえるだろう。

そしてさまざまに憶測され、噂が流れた。

第八回のデモ選では、C社一社の独走に〝マッタ〟を掛けるべくD、A二社が、積極的にこの行事に力を注ぐようなデモンストレーターを目差す若きスキー教師のためのスキーを作り出し、テスト用スキーを多くのスキー学校に送り届けた。その結果は、デモ30名中16人がC社、10人がD社、そして4人がA社のスキーという数字に現われたのである。

デモ選をめぐる商業戦争は、大きな転換期を迎えた。不自然なぐらい大きなマーク。派手なデザインのスキーが八方の会場に持ち込まれた。

この年、はじめて本部から、アマチュア規定に関するアピールが出され、〝商業主義の介入に歯止めを〟というSAJの方針が明らかにされた。

各選手は、マークにテープやシールをはり、このアピールに応えたのだが、こうした問題は、単にマークを消すといった手段で守られるものではあり得ない。それはアマチュアリズムというものが捉え難いものであると同時に、各人の思想と関わり合う問題といえるからである。

こうしたSAJの配慮は、メーカーの商戦を和らげる方向にはほとんど作用しなかった。第八回デモ選終了後には、デモ上位者のスキーメーカーの社員としての就職、あるいはモニターとしての去就が注目された。

テント村の一風景。バインディングの取り付けからワックシングまで、出場者の細かいところまでめんどうを見ていた

〝デモ選〟を考え直せ

こうした商業主義の主戦場とも感じられるデモ選が、冷たい雨の第九回に至ってそのムードをいたずらにとげとげしいものにしてしまったと思うのは、筆者ばかりであろうか。この行事がすぐれたスキー教師を選び出すためのものであるならば、いたずらに闘争心をかり立てて「何が何でも勝たねばならぬ」といった異常なムードにはならないはずだろう。冷たい雨に足をけいれんさせている仲間があれば、使っているスキーの如何を問わず、周囲の仲間が体をあたため合い、マッサージをし合って共にボールに挑むというムードがあってもいいのではないか。デモが、一般スキーヤーに注目される存在であるとの自覚に立てば、ワックスを塗らせるスキーヤーは、当然せめられていいといえるだろう。

また、まぶしい多くの種目の演技を終わった解放感からとはいえ、旅館の廊下に酔いつぶれる醜態を見せるスキー教師が存在してはならないのではないだろうか。

これまで情熱をかけてデモ選をサポートして来た地元のスキー教師たちや、かつての先輩デモの眼に、こうした彼らの行為がどう映っているか。

デモとして輝かしい過去を持つ何人かの先輩たちの中には「こんなデモなら、デモ選なんか止めてしまえ」、「もう、こんな連中の世話はしたくない」といった声も聞かれた。

そして彼らは、第一回目の頃をなつかしみながら、「この行事も現在の形ではなく、一シーズンが終わったところで、各地のスキー学校のスキー教師たちが集まって、技術の話やお互いに指導法の実際についての経験を出し合い、悩みをさらけ出し、語り合う集会にしたらどんなにすばらしいか。天気の良い日には黒菱へ行き、それぞれの学校から滑りのうまい人を出し、お互いに検討し合い、時にはハッスルしてスラロームをやる、そんな集まりにしたらどうだろうか」と語ってくれた。

だが今や夢物語でしかないのであろうか。

〝デモ選〟をもう一度真剣に考えるべき時機が来たようである。（しが・じろうスキー評論家）